

主観的社会階層がもたらすダブルモラルスタンダード —不公正知覚の役割—

趙 心語

【序論】

我々の社会では、社会資源が必ずしも平等にシェアされてはいない。そして、社会資源のバランスを取るために、再分配を意味する向社会的行動が求められてきた。しかし、直感に反して、社会階層の高い富裕な人々のほうが個人利益を最大化しようと不正に金を集めることがある一方で、社会階層の低い貧困な人々のほうが高い利他的志向を持ち、寄付行動といった向社会的行動をよくとることが示されている (e.g., Kraus, Piff, Mendoza-Denton, Rheinschmidt, & Keltner, 2012; Seuntjens, Zeelenberg, van de Ven & Breugelmans, 2019)。

ではなぜ、高階層者よりもむしろ低階層者のほうが向社会的行動を多く行うことがあるのか。社会的不平等が向社会的行動に及ぼす影響に関して、これまでの心理学研究は主に道徳心のアプローチから説明してきた。例えば、低階層者の同情心が高いため、彼らが向社会的に行動をしているという「同情心仮説」と、権力を追求しないという態度が利己な行動を抑えるため、間接的に低階層者を向社会的行動へと促すという「権力仮説」がある (Piff, Kraus, & Keltner, 2018)。しかし、それらの理由やプロセスはあまり具体化されておらず、十分解明されたとは言い難い。

そこで、本研究は高・低階層者の社会資源の不平等という社会的背景を出発点として、不平等による不公正知覚が向社会的行動を減らすという視点から、社会階層と向社会的行動の関係を明らかにしようとした。本研究は、不公正知覚に深く関わる主観的社会階層に着目し、「主観的社会階層が向社会的行動に及ぼす影響を明らかにすること」と「主観的社会階層が向社会的行動に及ぼす影響における不公正知覚の役割を明らかにすること」を目的として実験的な検討を行った。実験は、独裁者ゲームで自他の向社会的性を比較するというダブルモラルスタンダード「自分に甘く、他者に厳しい」の方法を用い、Wang et al. (2020)の追試的検討から始めた。

【実験 1】

実験 1 の実験デザインは、主観的社会階層 2 (高 vs. 低) × 分配者条件 2 (自分 vs. 他者) の完全参加者間計画であった。自分条件の参加者は、金銭の分配場面で自分が受け手にいくら分配するかを回答した。他者条件の参加者は、ある架空の人が受け手にいくら分配するかを回答した。Web 上での質問紙実験を行ったところ、向社会的性について参加者は「自分に厳しく、他者に甘い」という逆パターンのダブルモラルスタンダードが得られた。こうした結果は、低い主観的社会階層と低い客観的社会階層 (最終学歴、個人収入) で共通していることがわかった。不公正知覚は向社会的性に負の予測をしていたが、主観的社会階層と向社会的性の媒介変数にならなかった。そこで、実験 1 の結果の頑健性と不公正知覚の役割を検討するために実験 2 を行った。

【実験 2】

実験 2 では、実験 1 の手続き上の問題点を改善し再追試を行った。その結果、主観的社会階層による逆パターンのダブルモラルスタンダードが再び観察されたが、統計的には有意でなかった。客観的社会階層では、最終学歴が低い参加者がより向社会的であることが確認できた。一方、不公正知覚は、その測定法を変えても向社会的性に負の予測をする以上のことは確認できなかった。探索的分析より、逆パターンのダブルモラルスタンダードが有意にならなかったのは不公正知覚が低いことにある可能性が示され

た。

【実験 3】

実験 3 では、実験 1 の方法を用いて主観的社会階層が向社会的行動に及ぼす影響と、その影響における不公正知覚の役割を再検討した。さらに、実験 1 と実験 2 の結果より、不公正知覚が向社会性に負の予測をしていたため、実験 3 ではその原因を「不公正回復動機づけ」と「一般的信頼感」を用いて検討した。その結果、不公正知覚の低さが原因で正・逆いずれのパターンのダブルモラルスタンダードも得られなかった。一方、実験 1 と実験 2 と一致し、実験 3 でも最終学歴が低いほど参加者の向社会性が高かった。また、不公正知覚が低いほど参加者の向社会性が高かった。ただし、不公正知覚が向社会性に負の予測をする原因は「不公正回復動機づけが高い」ことでも、「一般的信頼感が低い」ことでもなかった。

【考察】

本研究は「主観的社会階層が向社会的行動に及ぼす影響を明らかにすること」と「主観的社会階層が向社会的行動に及ぼす影響における不公正知覚の役割を明らかにすること」という2つの目的に基づき、3 つの実験を行った。その結果、3 つの結論が得られた。① 基本的に、高階層者より低階層者が向社会的である。特に、低学歴の人が向社会的行動を取りやすい。② 低階層者は「自分に厳しく、他者に甘い」という逆パターンのダブルモラルスタンダードによって向社会的行動をとる傾向が強い。つまり、低階層者は他者に対してより自分に対して向社会性が高くあるべきだと考えている。さらに、③ 低階層者による「自分に厳しく、他者に甘い」という逆パターンのダブルモラルスタンダードは不公正知覚によってもたらされる可能性がある。したがって、低階層者が向社会的行動をとるのは、主観的社会階層そのものによってではなく、それと表裏一体の関係にある不公正知覚がはたらくためであると考えられる。以上により、今後の研究では、向社会的行動に対する社会階層の影響を明確化するために、より様々な方法の検討を通して、不公正知覚の役割を明らかにすべきだと考えられる。(社会心理学)